

ムグブの身体技法

石井 浩一¹⁾

Physical technique of Megebug

Hirokazu Ishii¹

Key words : Megebug, physical technique, faith

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education, Ehime University, 4, 67-73, March, 2003)

キーワード：ムグブ 身体技法 信仰

I 問題の所在

インドネシア・バリ島のスラユ (Seraya) 村¹⁾は、カラングasn郡の首都アンラブラから東へ約10km、バリ島の東端に位置する村である。面積2813.215ha、人口14,639 (男：7,248, 女：7,391-1977年)。Serayaの語源は、この村がバリの一番端にあるということで、「あなたの頭です」を意味するsirah-nyaが後にserayaに転じたという。この地域は多くの丘陵と山に囲まれており、土地の多くは痩せているが、東側の方が比較的肥沃である。村人はここで、トムロコシ、ピーナツ、芋、豆、チリ、マンゴー等の生産に従事しており、大多数は農業で生計を立てている。

この村について研究している人は、まずほとんどいないだろう。というのも、そもそもこの村には研究者の興味を引くような特別な慣習や文化はないと考えられているからだ。しかし、スポーツ人類学にとってはとても興味深い事例がこの村に眠っている。ムグブ²⁾ (写真1) -これが本研究の対象となる民族スポーツである (むろん、彼らはムグブをスポーツとは認識していないだろう)。ムグブ (Megebug) は、バリ語で「打つ」を意味するgebugに接頭辞meが付くことによって、「互いに打つ」を意味する。

ムグブを行うのは男性のみで、2人が相対し、双方左手に防御用のエンデ (盾)、右手に攻撃用の1本のロタン (棒) を持って、攻防の応酬を行う。その運動

形態から、ムグブは一見、武器格闘技に見える。しかし、このムグブをよく観察してみると、単なる武器格闘技ではなく、踊り、呪術らしきものが混在して一個のムグブというスポーツを形成していることが見えてくる。

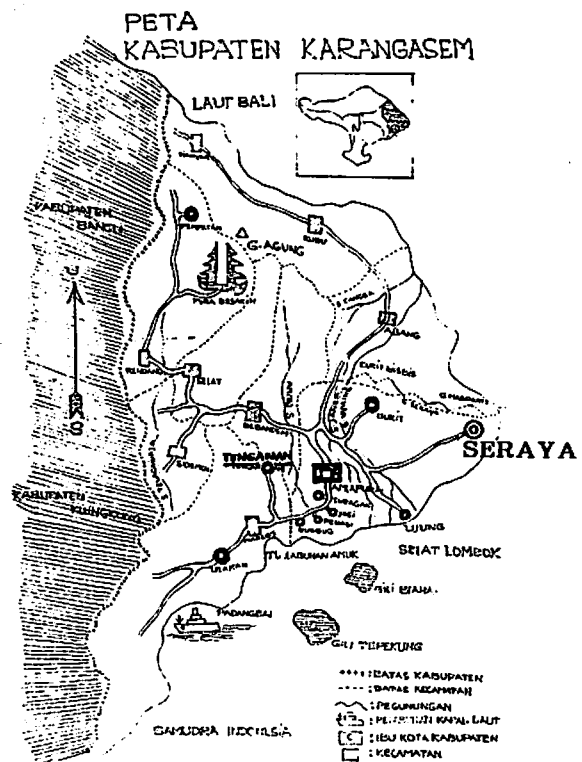


図1 カラングasn郡とスラユ村概念図
(Anak agung 1980/1981の付図より)

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,
Japan

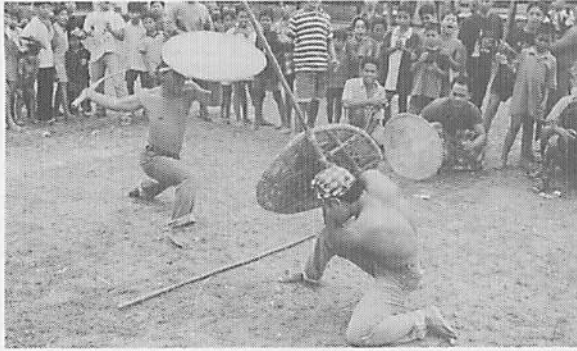


写真1 (筆者撮影)

本研究では、このようなムグブの多面的な身体技法に着目し、そのあり様について考察するとともに、変化についても若干の考察を行う。なお、ムグブはロンボク島ササク族のプリシアンと関係があるため、本文中バリ語の後に、カッコ内にSとしてササク語を併記することにした。

本研究は2000年8月、2001年8月に、バリ島及びロンボク島で行ったフィールドワークに基づいており、本文中特に注記のない箇所は筆者の聞き取り情報に拠るものである。

II ムグブ・ダンス

ムグブは単なる武器格闘技ではない。ムグブのプレイヤーは踊る。闘いながら、踊るのである。ムグブにおいて闘いの前のダンスはとても特殊なもので、プレイヤーはロタンを動かしたり、エンデをロタンで打ったりしながら、左右に、また、自分の周囲を回ったりする。初めに、ダンスは他のプレイヤーたちを挑発し、発奮させるために、すぐには闘わない他のプレイヤーによって踊られる。その間プクンバル（プレイヤーを選別する役）は、挑発に乗ってくるプレイヤーたちを見比べているのである。

普通このダンスは、ショーとしてのムグブが始まる前に踊られる。ムグブの参加者がそれぞれ順番にエンデとロタンを取り、ムグブをしたい衝動に駆られて、臨戦態勢で、自己の技能を鼓舞して見せるのである。彼らは、精神的にロタンで自分のエンデを叩き、時には背中や腰を叩く。他のプレイヤーを待っている間、彼らは踊り続け、プクンバルはこの間を利用してプレイヤーを捜す。時折、プクンバルは闘いの前にプレイヤーを決定する。この場合、彼は普通これまでのチャンピオンたちを選ぶ。そうすることによって、ムグブは大変活気づくのである。なぜなら、チャンピオンたちには大勢のサポーターが同行しているからである。

ムグブが行われている間、他のダンスも行われる。それはンゲンジェ（S：ンゲチョ）と呼ばれる（写真



写真2 (筆者撮影)

2)。相手に一撃を加えると、このダンスをする。腰と尻を左右に振り、おどけた表情で相手を挑発する。さも「ほら、どうした。自分は何ともないぞ。」とでもいいが、ムグブの経験に乏しいプレイヤーはこのダンスを見て、怒ることもある。こうなれば相手の思うつぼで、動揺したプレイヤーは、次のゲームも平常心を保てない可能性が高い。

このように、ムグブはダンスの分類にも入る。そこで、ここではバリのダンスの分類を抑えておこう。周知のように、バリには数多くのダンスがあり、その特性と振り付けによっていくつかに分けることができる³⁾。まず特性によって分類すると、以下のようである。

- ①男性のダンス—やわらかいダンス、勇敢なダンス
- ②女性のダンス

上記分類によると、ムグブは勇敢なダンスに属する。なぜなら、後述するように、ムグブは伝統的軍事訓練に関連する戦闘ダンスの一種であるからだ。

ヒンドゥーがバリ島に入ってきた時、ヒンドゥイズムはいくつかの戦闘ダンスに影響を与えた。例えば、ラーマヤナやマハーバーラタについて語るようになったこと。しかし、原始的ダンスはまだ残っている。いくつかの新しく創造されたダンスは原始とモダンを組み合わせたものである。

一方、振り付けによる分類は以下のようである⁴⁾。

- ①伝統的ダンス—原始的ダンス、民族ダンス、古典的ダンス
- ②新たに創られたダンス

この分類によると、ムグブは伝統的ダンスに入る。バリのダンスは、またそのダンスが神聖であるか否かによって分類される。この分類によって、バリのダンスは以下の3つに分けられる⁵⁾。

- ①ワリ・ダンス：ヒンドゥーの儀式と関係があり、寺院その他で踊られるすべてのダンス
- ②プバリ・ダンス：物語性を帯びた、儀式の伴奏のようなダンス
- ③バリバリアン・ダンス：バリバリアンとは、ショー

とかパフォーマンスの意味で、観客に見せるためのダンス

この分類では、ムグブが時々、雨乞いのダンスとして行われることから、ワリ・ダンスに入ることになる。しかしながら、ムグブはまた、バリバリアン・ダンスにも分類できる。

ムグブはスラユでとても人気がある。若者も年寄りも、ほとんどの人がムグブを好きだし、時々女性でさえムグブを観る。時折、若者たちは時を忘れて踊り続ける。例えば満月になった時、あるいは鳥が稲を荒らさないよう、水田で待機している時、彼らはグループを作ってムグブをするのである。

Ⅲ ムグブのルール

一面では、軍事訓練も兼ねた戦闘ダンス、また一面ではバリ・ヒンドゥーの儀式としてのダンス、さらにはショーとしてのダンス。このように多面的なムグブは、ゲームとして行われる場合、どのようなルールに基づいているのか。以下に、ゲームの進め方とルールについて詳述する⁶⁾。

1) 構成員

①ブボト・グブ (S:ブパドゥ)

2人の男によって行われる。老若は問わない。

②ブクンバル (トゥカン・ケンバル)

ムグブのプレイヤーを選別する責任を持つ者。ブクンバルは2人のプレイヤーを比較して、双方がほぼ同等の能力を持っているかどうかを判断する。普通は、ブクンバルが双方の経験・知名度・技能・強健さ・年齢・体格から判断することになっている。

③バムラス

バムラスは6人から成り、ボクシングのように、反則があった時にプレイヤーを分ける義務を負う。ムグブを行っている間、彼らはしゃがんでエンデを持っている。

2) 用具

ムグブではエンデを防御用に、ロタンを攻撃用とする。スラユで使われるエンデは牛革を張った周囲80cm程の円形の盾である。盾の周囲はロタンで補強する。エンデの裏面には持ちやすいように把手が付いている。牛革はとても丈夫で、ロタンの攻撃に十分耐え得る。ロンボクのエンデは形状が異なり、縦1m横75cm程の四角形である。スラユで使っているエンデが元の形で、18世紀初頭のプリシアンは円形のエンデを使っていたという。

ロタンは「籐」の意味で、厳選されたもののみを用いる。それは、十分に成長した、まっすぐなものでな

ければならない。かつてバリ人は、わざわざロンボクに行って良質のロタンを入手した。ロタンの長さは、およそ165cm。中央部とその他2ヶ所に、補強用の弦を巻き付けてある。この弦は、ロタンあるいはイジュ（日本でいうシュロ）である。厳選されたロタンを打撃用具にするためには、特別な方法がとられる。ロタンを火であぶりながら、微妙な曲がりや矯正していく。さらにより強固にするために、時々砂糖や蜂蜜を垂らす。バリの王国時代が終止符を打つまでの間、ロタンの周囲はブリキを幾重にも重ねて補強されていた。また他には、クカラという蜂の排泄物を使い、乾燥するまで放置しておくという方法もある。幾重にもしたり、蜂の排泄物を塗ったりすることの目的は、自然に身についた不死身さか、あるいは呪術による不死身さなのか試すためである。

3) コート

ムグブを行う場所に、特定のものが必要とされるわけではないが、普通人々は椰子あるいはその他の木の下のように、日陰を選んでムグブを行う。地方官庁は時々、国が定めた休日にムグブを開催する。この場合は、できるだけ多くのプレイヤー、サポーター、そして観衆を収容するため、大きな場所を必要とする。屋外の広い場所であれば、そこがコートとなる。

4) ユニフォーム

ムグブのユニフォームは、伝統的コスチュームと同じである。プレイヤーは上半身に衣服を付けることや、ナイフその他の武器を持ち込むことは禁じられている。

①デスタル

デスタルとは、頭を覆うスカーフのようなものである。バリではウドゥンとして知られている。ウドゥンには数多くの形状があり、それぞれ呼称が異なる。

○ケコジョンガン：とうもろこしの形をしており、サトゥリア（王族階級）の人々が付ける。

○ベディダカン：結びが船の形に似ており、後頭部で大きく三角形に折る。階級の高い人々が付ける。

○レレペカン：ベディダカンに似ているが、三角形の折りが側頭部にくる。普通、階級の低い人々が付ける。

○ベボンコサン：この形状は、戦争に行く人々のための特別なものである。頭部すべてを多し、結びは前か後ろである。

②カイン・サルン

カイン・サルンとは、腰から脚までを覆う大きな布のことで、儀礼には欠かせない衣装であるが、若者はあまり身に付けなくなった。ムグブの際には、日常付けるものより、短めのサルンを付ける。これは重要な

ことで、相手の足でサルンを踏まれないようにするためである。かつてサルンの装着については特殊なルールがあった。それは、サルンと共に腰帯を着用するというルールである。しかし、今日サルンの装着については誰も気に止めなくなった。Gパンでも誰も注意はしない。

③ガムラン（音楽及び楽器：写真3）

ムグブはダンスでもあるから、音楽の伴奏が欠かせない。ガムランはムグブが始まる前及びムグブの間、常に演奏されるが、それは5つの楽器で構成される。

○ケンダン：牛革で覆われた小さなドラムのような楽器

○レオンあるいはボナシ：青銅器のボウルを逆さにしたようなものを調律して一列に並べた楽器

○チェンチェン

○ケンブル

○ゴン

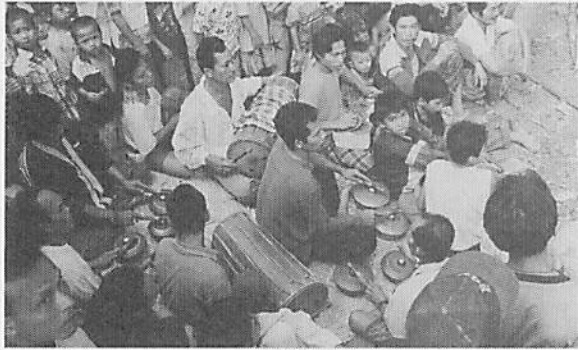


写真3（筆者撮影）

かつてガムランはとても単調で、ケンダンとケンブルのみであったという。ムグブ狂とでもいふべき人々にとって、音楽は彼らを刺激し、その背中をぞくぞくさせる。ガムランの機能は、まさに戦地に乗り込む時の進軍ラップと同じである。ガムランのメロディーはムグブの段階に応じて、次のように変わっていく。

第一段階：メロディーは柔らかく、なめらか（ブクンバルがプレイヤーを捜し、双方比較している。）

第二段階：力強く、大きく（これから闘いに臨むところ。プレイヤーは一声を上げ、衣服を脱ぎ、デスタルを付ける。2人のプレイヤーは正装し終えると、エンデを持ち、ロタンを選択する。）

第三段階：もっと力強く、もっと大きく（プレイヤーは互いに打ちかかる。一撃することをタルンガンと言い、3度、4度とタルンガンが起こると、ブクンバルあるいはジュル・サユによって分けられる。）

この段階が終了すると、メロディーはまた初めの旋律に戻り、繰り返される。

④禁止事項

○境界線を踏んだり、越えたりしないこと。

○相手の腰から下を打たないこと。

○エンデで打たないこと。

○ムルケ（ボクシングでいうクリンチのこと）をしないこと。

○準備ができていない相手を打たないこと。

○相手の指を打たないこと。

○メシンセトをしないこと。メシンセトとは、サルンを股の間から通して後ろで結ぶ着用法のことで、ムグブの間、メシンセトは禁じられている。なぜなら、メシンセトは下品で礼儀を欠く着用法と考えられているからである。

⑤技術用語

ムグブには、独自の打撃技術がある。これをパンテガンという。パンテガンには以下の種類がある。

○ネベン：相手の頭部あるいは腰部に対して、まっすぐ正確に打つこと。ニリスとも言う。

○ニャウー：ネベンの反対で、打撃ミスのこと。

○ニャンバル：右側頭部をねらう打撃。

○ニャテ：後頭部、あごをねらう打撃。

○ニョントロ：短く速い打撃。

○ニョレ：エンデを持っている左肘をねらう打撃。

○ケクレティカン：ロタンの先端を使う打撃。ヌクトックとも言う。

Ⅳ ムグブとプリシアン

1) カランガスとロンボク西部の関係史

古老の話によると、ムグブは遥か昔からあったという。スラユ村の地理的状況と人々の信仰体系からすれば、このスポーツが代々伝えられてきたことは、それほど奇異なことではない。ムグブがどこで始まったのか。それを知るためには、17世紀に始まるカランガスン王国とブジャンギ王国との関係史を繙く必要がある。両国の関係史は、まずロンボク中心部のブジャンギ王国から始まる⁷⁾。

16世紀に入ると、ブジャンギ王国は発展し、領土を拡大していった。時の王はマス・ムラジャ・クスマ。王にはとても強靱な腹心バンジャル・グタスがおおり、彼にはとても美しい妻がいた。名をロロ・ジョンティ、またの名をデンデ・マス・クニンといった。彼女のあまりの美しさゆえ、マス・ムラジャ・クスマ王は恋に落ち、我が物にしたいと思うようになった。彼は一生懸命彼女を口説いたが、彼女を我が物にするこ

とは叶わなかった。そこで彼は、夫バンジャル・グタスを亡き者にしようと考えた。しかし、バンジャル・グタスは強靱な上、多くの部下を従えていた。ついに彼らは一戦を交えることとなった。結果、バンジャル・グタスは勝利した。

当初、プジャンギ王国はスンバワの王国、バンジャルマシンの王国、そしてカラングスン王国に援軍を求めた。まず初めに、スンバワとバンジャルマシンの王国が援軍を送った。バンジャル・グタスは敗北寸前になった。ちょうどその頃、イ・グステイ・クトゥ配下のカラングスン軍が到着した。彼らの到着を知って、バンジャル・グタスは、自身がカラングスン王国のティアニヤールの出身であることを告げるために、イ・グステイ・クトゥの前に現れた。イ・グステイ・クトゥは彼を信じ、プジャンギの王に対抗するため、彼の側に付いた。結果、プジャンギの王は敗れた。最終的に、プジャンギ王国はカラングスン王国に属することになり、2つの地域に分割統治されることになった。ロンボク西部はイ・グステイ・クトゥの支配下に、東部はバンジャル・グタスの支配下に治まったのである。

ロンボクにおけるスラユの人々の活動を知るためには、同島におけるカラングスン王国の発展史を知っておく必要がある。なぜかという、このことがムグブの発祥及びムグブのロンボクへの伝播に深く関わるからである。先述したように、プジャンギ王国は陥落し、カラングスン王国の支配下に入った。

事が起こったのは1692年。カラングスン王国はこの年から、ロンボク西部を序々にその支配下に治め始め、拡大していった。そのため、カラングスン王国は、さらに小さな小国に分割された。それゆえ、1744年には数多くの小国が乱立する状況になっていた。シンガサリのカラングスン王国(1866年、チャラヌガラ王国に名称変更)、マタラム王国、バグサンガン王国、バグタン王国、クディリ王国、スンコンゴ王国、バリ島カラングスンから興った一族がこれら6つの小国をすべて統治した。ロンボク西部のカラングスン王国はその後も勢力を拡大し、多くの人々がバリからロンボク西部へ移住することとなった。

しかしながら、6つの小国は常に争いが絶えず、最終的に1805年、カラングスン王国シンガサリが最も強大になった。19世紀初頭、カラングスン王国はバリのブレレンと、もう一つロンボクに領土を拡大したため、バリの中でも強大な国に成長した。その後オランダがロンボクを占領し始めるまでのおよそ100年間、カラングスン王国は大いに発展を遂げたが、1894年、オランダの侵攻に抗戦して敗れた。しかし、オランダ

の植民地時代を経て今日までも、カラングスンとロンボク西部は関係を保ち続けている。ムグブに関して言えば、8月17日のインドネシア独立記念日及びその前後に、スラユの人々がロンボクに渡り、ムグブの対抗試合が行われている⁸⁾。

2) 伝播

インドネシアのいくつかの地域では、ムグブに似たダンスを持っている。ロンボクにはプリシアンがあるし、スンバワ島のスンバワ・ブサールにはカラチが、ビマにはパリスというダンスがある。ボルネオ島の戦闘ダンスはマンダウと呼ばれ、ロタンを使わず、剣で闘う⁹⁾。この中で、ロンボクのプリシアンが最もムグブに似ている。ほとんどのロンボク島民はプリシアンと呼ぶが、ロンボク東部の人々はプリセアン、ロンボク西部ではブランドウンガンあるいはブラドゥカンと呼ぶ¹⁰⁾。しかしながら、マタラムとチャラヌガラではムグブなのである。なぜかという、先に述べたように、バリからの移住者がこの地域に居住しているからである。

ムグブはスラユ村においてのみ発達した。一方、プリシアンはロンボクのほぼ全域において発達した。プレイの方法、用具は双方共ほぼ同じである。したがって、上記の関係史と合わせると、ムグブはロンボクから伝播したと推察される。ロンボクのプリシアンがスラユに渡ってムグブになったという仮説を検証するためには、プリシアンの歴史を知る必要がある。プリシアンはロンボクの至る所に確認される。古老と文化研究者の話では、プリシアンはロンボク東部に存在したスルパラン王国の時代から存在したという。とすれば、ここがプリシアンの発祥地であることを窺わせる。

リンジャニ山の東側にあるスンバルン村とバヤン村はロンボクのなかで最も古い村といわれ、この2つの村にプリシアンが確認される¹¹⁾。このようなプリシアンの分布は、ロンボクの王国の発達と軌を一にしていると考えられる。すなわち、ロンボクの王国はまず、東のスルパランから始まり、中央部のプジャンギへ、のち西部へと発展していった。先に述べたように、ロンボク西部の住民は、元々バリのカラングスンから渡ってきた人々である。プリシアンはスラユでムグブとなって発達した。かつてカラングスン王国の兵士は戦争のためロンボクに渡り、プリシアンを持ち帰った彼らは、それをムグブという名称に変え、伝えたと考えてよいだろう。ムグブの発祥地はスラユであるが、今日近隣のアンチャク、タナ・バラクそしてティンジャラスにも及んでいる。

ムグブがロンボクから伝播したという他の傍証は、

スラユの人々はいつもムグブで用いるロタンを入手するために、ロンボクに渡っているということである。ロンボクのロタンはとても強く、ヤシ油を塗り込んで天日で乾燥させると、さらに強くなるという。

V 信 仰

1) 祈雨観念

実際に我々は、インドネシア各地において、プレ・ヒンドゥー文化の残存を見いだすことができる。この残存文化は原始的文化とも呼ばれ、いくつかの儀式や芸術に表れている。原始的文化においては呪術的ダンスがある。すなわち、自然現象に影響を及ぼす（と観念された）ダンスのことである。ムグブ、プリシアン、そしてジャワ中心部のプルバリングにあるウジュンガン・ダンスである。これら3つのダンスは、時々雨乞いのために神に捧げられるダンスである¹²⁾。原始的ダンスはまた、カリマンタンのダヤク族、ヌサ・トゥンガラ諸島、イリアンジャヤにも存在する。これらのダンスは雨乞いの他に、自らの潜在能力を高めるために、また厄災から身を守り、さらには病気の回復を願って踊られる。

ムグブとプリシアンに共通する重要な事項は、祈雨観念である。古の人々の間では、儀式によって生贄を捧げなければ、望みは叶えられないと信じた。バリ語でタブ・ラという生贄の儀式のために誰かが犠牲にならなければならなかった¹³⁾—そう、誰かが死ななければならなかったのである。しかし、文明の発達による思考の変化に伴って、人間の生贄は牛、水牛、豚、アヒル、鶏に代えられた。

ロンボクのササク族は、長い乾季の時に恵の雨を乞うために、水田でプリシアンを行った。けがをした選手が多ければ大雨が降る。神はその血を雨の水で洗い流してくれる。そう信じたのである。スラユの人々は長い乾季の時、普通は8月、バリ・カレンダーでは第四の月にムグブを行った。ムグブは雨が降るまで1ヶ月続くこともある。ムグブを行っている間、傷つき流血することをバリ語のタブ・ラ、すなわち血の生贄と信じるのである。また、ササク族では土地がよく肥える兆候とみなすのである。雨乞い儀礼は降雨防止儀礼と同様、バリの村々ではとてもよく知られた儀礼である¹⁴⁾。

2) 不死身観念

上記のように、数多くの戦争がロンボクの旧カラングスン王国において起こっていた。戦うためには、強い兵士を持つ事が重要である。「強い」というのはどういう意味かという、兵士は数において優り、被害

をできるだけ最小限に抑えるということである。スラユに次のような伝承がある¹⁵⁾。

スラユ村の主導者たちが会議を開いている時、会議に加わることを許されていなかった数人が入り込んできたため、正門脇に立っていた護衛がパンダン¹⁶⁾で打ちつけた。しかし、ひっかき傷ができるはずの体には、何一つ残っていなかった。スラユの人々は無傷の体に驚き、敬意を表した。スラユの人々は、この出来事があったから、無傷でいられることを信じ、そのためにある飲み物を常時携帯しなければならなくなったという。この飲み物が何なのか不明だが、今日例えば、呪術のかかったヤシ油を小びんに入れて、それを必要に応じて飲むということは行われている。また、かつてスラユに、スクフ・プタン・ダサという不死身のグループがあったともいう。

このように、スラユの人々は不死身の観念を持っており、多くの人々がカラングスン王国の兵士になった。彼らはとても強靱な不死身さを持っていた。スラユからカラングスンに渡った多くのスラユの人々は、カラングスン王国の歴史上、特に軍事部門において重要な役割を担った。

しかし、不死身信仰については、スラユの人々とロンボク島のササク族とでは多少異なっている。かつてササク族は、自らの潜在能力を試す目的でプリシアンを行う時、不死身を得るために、ササク語でブアドンと呼ばれる呪力の宿った御守りを用いた。一方、スラユの人々は打たれても痛くないという自信を持っていた。しかし、プリシアンがスラユに伝播するとともに、カラングスンの人々はこうした呪術観念に興味を持ち、ササク族が使っているのと同様、御守りを用いるようになったのである¹⁷⁾。スラユの人々がササク族の呪術を用いる以前は、呪力やマントラ（呪文）は用いず、自然に湧き出てくる不死身の力を好んだ。それは、スラユの人々の間に古くから言い伝えられてきたことである。

御守りには、ブル・ウンベツ（穴のない竹）、ブン・ミンマン（木の一種）、バトゥ・メコチャク（石の一種）といったものがある。むろん、彼らは特殊な場所からこれらのタリスマンを採取している。これら3つの御守りには以下の機能がある¹⁸⁾。

①ゲゲメ（S：スンカリス）

敵から身を守るためと、負傷した時の痛みの感覚を弱める。

②ペンギンパス・インパス（S：スンカリス、スンピリス）

敵の打撃をかかわす。

御守りを使わずに、呪文を用いる者もいる。その目

的は相手の力を弱めることにある。これをバリ語でンデスティあるいはンゲレヤク（S：セントルク・バルン）という。ンデスティ、ンゲレヤクは、パンギワというエスノ・サイエンスに分類される¹⁹⁾。パンギワは普通、黒魔術を好む者やバリアン²⁰⁾になるために習得されるものである。黒魔術には数多くの種類があり、各々の名称は黒魔術の機能に従って付けられている。

ベベテンガン（S：センガウン・アウン）は誰かの目をつぶすための黒魔術である。ペムナ（S：セボンダル）は敵の魔術を使えなくするものである。スラユの人々の中にはこれまで示してきた呪術一切を用いない者もいる。しかし、彼らは相手の不死身をうち負かすための多くの方法を知っている。例えば、それは次の3つの方法である。

- ①相手のロタンを踏み越える。
- ②ロタンの先端を足の親指と人差し指の間に挟む。
- ③ロタンの先端を草や土砂あるいは耳に付けた花びらで磨く。

VI ま と め

スポーツは当該社会の文化の衣を纏う。ムグブはロンボク島のササク族が持っていたプリシアンがスラユ村に伝播し、変化したものである。したがって、ムグブの身体技法にはスラユの文化が刻印される。方法や用具はプリシアンとほとんど変わりがない。しかし、ムグブはバリの土着信仰タブ・ラと習合して、雨乞いの儀礼として機能するようになった。

雨乞い儀礼としてのムグブでは、流血が必要となる。かつては、ロタンに金属製の細工をするなどして、不死身信仰を確認し、流血を促したが、今日ではこうした手は加えず、ロタンそのものを使うようになっている。これは不死身信仰が薄れてきているからであり、ムグブの愛好者には不死身信仰がなかなか理解されにくい状況になっている。

また、ムグブは盾と棒を用いて打ち合うという運動形態ゆえ、娯楽として、時にはショーとしても機能する。インドネシア独立後は1年に1～2回程度、スラユ以外の場所でショーとして行われるようになった。それは、政府が決めた行政区で開催される。ショーのためにスラユ、ティンブラ、ブンガヤといった多くの村から有名なムグブのプレイヤーが招待されるのである。このような状況の変化は、ムグブの身体技法に内在する競技性を発達させることになる。一方、ダンスは徐々に後退する。ムグブはカラングスの伝統文化として政府から特別の助成を受けている一方、その身

体技法においては競技性が強く発達しつつある状況に現在あるといえよう。

注記及び参考文献

- 1) 表記はDesa Seraya であるが、現地の発音に最も近いスラユ村とした。
- 2) Magebug, Megebugという表記があるが、後者をもってムグブとした。単にグブという場合もある。
- 3) Anak agung gde putra agung 1980/1981, p.1を参照。
- 4) Ibid., p.2 を参照。
- 5) Ibid.
- 6) Ibid., pp.46-57を参照。
- 7) Ibid., pp.11-14を参照。
- 8) インドネシアでは、独立記念日を挟んで約1ヶ月半、祝賀行事として様々な民族スポーツが各地で披露され、対抗試合も行われる。
- 9) Anak agung, op. cit., p.3を参照。
- 10) Ibid.
- 11) Ibid., p.19を参照。
- 12) Ibid., p.5を参照。
- 13) I Ketut Ginarsa 1994/1995 ,pp.12-17を参照。
- 14) Anak agung, op.cit., p.31
- 15) Ibid., p.28を参照。
- 16) パンダンとは、タコノキ属（学名パンダヌス）の植物で、肉厚な細長い葉の両側にびっしりと刺がある。スラユと同じカラングス地方のトゥガナン・プグリンシンガン村とトゥガナン・ダウ・トゥカツ村には、パンダンで闘うスポーツ「ムカレカレ」がある。
- 17) Anak agung, op.cit., p.28を参照。
- 18) Ibid., p.29を参照。
- 19) Ibid.
- 20) いわゆる呪医のことで、神の啓示を受けた者が、カウイ語で書かれたロンタル文書を読解して医術を学ぶ。

文 献

Ahmad Yunus, Bambang Suwondo (1979/1980)
Permainan Rakyat Daerah Nusa Tenggara Barat,
Departemen Pendidikan dan Kebudayaan

Anak agung gde putra agung (1980/1981)
Magebug dan Mekare Seni Tari Traditional di Karangasem Bali, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Direktorat Jenderal Kebudayaan

I Ketut Ginarsa (1994/1995) *Cock Fight in Bali*, cultural media project, directorate general for culture, department of education and culture